
素顔の正義

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素顔の正義

【Nコード】

N0892BA

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

北條潤は優秀だが人間性故に誰からも嫌われる警察官僚だったが、だがその彼が事件で見せるものは。仮面ライダーアギトの北條さんをモデルにした作品です。

第一章

素顔の正義

北條潤という。

黒髪で広い額を隠している。引き締まった顔をしていて頬は細い。目は一文字の一重であり唇は薄い。やや薄い眉も目と同じ様に一文字だ。背は高く一八〇ある。

ある有名大学の法学部を優秀な成績で卒業し警視庁に第一種で入った。所謂キャリア組だ。

キャリアといえは東大法学部と言われているが彼はその点は違っていた。だがその東大組から見てもだ。彼の能力はというところ。

「勝てないな、あいつには」

「あんな切れる奴はいないな」

「どんな捜査もあいつが入れば解決する」

警察官としてだ。まずはそこが評価されていた。

「現場にも顔を出して的確に動いて指示を出してな」

「動きに無駄がない」

「エルキュール」ポワロの頭脳とフレンチ警部の緻密さ」

この二つがあるというのだ。

「それにマイク」ハマーの行動力もある」

「フィリップ」マーロウの肝もな」

「とにかくあんな奴は他にはいない」

「おまけに腕も立つしな」

しかも強いというのだ。

「剣道に柔道もできる」

「いつもやってるからな、稽古も」

「多分あいつが警察庁長官になるぞ」

「絶対にだな」

その能力は誰もが嫉妬し羨望するものだった。しかしだ。

その人間性はどうかというところだ。

これもだ。誰もが言った。ただし忌々しげな調子でだ。

「嫌な奴だ」

「嫌みな奴だ」

「何かあればすぐに嫌なことを言う」

「あんな嫌な奴は見たことがない」

「全くだ」

人間性についても言われるがそれは最悪だった。まず同期で彼の友人と言える様な者はいなかった。それはキャリアの先輩達からもだった。

「俺はあいつに濡れ衣を着せられたんだ」

「些細なことを報告されて左遷だぞ」

「大袈裟に人事に報告されたんだ」

「俺の後釜にあいつが入って実績をあげて出世したんだ」

「あいつのせいで俺は失脚だ」

「あいつだけは許さないからな」

こうした感じだ。彼に左遷させられたり失脚させられたりした者ばかりだった。彼は先輩を飛び越えてさえ出世していたがその裏にはだ。

こうした蹴落とされた者が大勢いた。彼の警察での評価はつまりだ。

有能だが嫌な男、こうしたものだ。だ。

しかし彼自身はだ。その評価について何とも思わずだ。

仕事をし事件を解決し出世をしていく。その為まだ三十代だといふのだ。

警視長だ。警視正からだ。

そうやってだ。さらに功を挙げていた。

その彼の下にいる部下達もだった。彼の下で仕事をしている合間にだ。

休憩室でコーヒを飲みながらだ。こんな話をしていた。

「緊張するな」

「ああ、俺達には何も言わないけれどな」

「それでも何かな」

「鋭いしな」

剃刀とまで言われている。あの後藤田正晴以上の切れ者だと言われている程だ。

それに加えてだ。部下の彼等が見た北條は。

「コンピューターみたいに正確だしな」

「動きに無駄がないんだよな」

「事務処理も完璧で」

「仕事は問題ないんだよ」

「私達には嫌味も言わないし意地悪もしない」

「責任は自分で取るし」

そういうことは弁えているというのだ。

第二章

「けれどそれでもな」

「何か。冷たいよな」

「機械がいるみたいで」

「やっぱり好きになれないな」

「どうしてもな」

これが部下の彼への評価だった。彼は基本的には部下には何もしない。己の席で事務処理をしている動きも実に速い。そして。

彼の机は仕事に必要なものの他には何も無い。何一つとしてだ。ペンがあり書類がありノートパソコンがありだ。それだけだ。ただひたすら無言で仕事をしていた。それが全て終わるとだ。

今度は自分のノートパソコンでだ。明日以降の仕事の予定を見たり部下の仕事のチェックをした。そしてその仕事に不備があると。無言でメールで間違いを指摘してだ。終わりだった。

そんな仕事ぶりだった。とにかく無機質だ。

しかしその彼のところにだ。ある日だ。

警察のトップからだ。こゝろ声がかかった。

「頼めるか」

「テロリストがですか」

「そうだ、過激派だ」

今ではかなり少数派になっている共産主義の系列の過激派だった。

「あの連中が暗躍をはじめた」

「ではマークをですね」

「そうしてくれ」

トップは彼にだ。密かに話した。

「そして何かあればだ」

「その時はですね」

「彼等を逮捕してくれ」

「そして必要とあらば」

しかしだった。ここぞだ。

北條は強い声でだ。こう言うのだった。

「最終的な手段を採らせてもらいます」

「？まさか君は」

「何か」

「犯人を射殺することも考えているのか」

「相手はテロリストです」

これが北條の返答だった。

「ですから」

「いいのか？それをやれば」

「それをやれば？」

「君は」

「テロリストは許してはなりません」

また答える北條だった。

「それだけです」

「本気か」

「はい、本気です」

無表情でだ。答え続ける彼だった。

「では。その時は」

「一つ忠告しておく」

そのトップは厳格な顔で彼に対して述べた。

「若しそれをやればだ」

「私自身にですな」

「それでもいいのだな」

「そうだ、そうなくても保障できないぞ」

日本では何故か犯罪者の人権が妙に擁護される。テロリストに対してもだ。所謂人権派という面々がそれを声高に主張するのだ。

そうした面々は国家権力なるものに対しては妙に敵意を見せる。

とりわけ警察はだ。今そのトップが言うのは彼等のことに他ならな

あい。

しかしだ。それでもだ。

北條はだ。平然として言うのだった。

「構いません」

「左遷は怖くないのか」

「全くです」

そうだというのだった。

「何が怖いのか」

「言うものだな。人は出世できる立場になると左遷を恐れるようになる」

他には失脚もだ。とにかくその地位が崩れるのを恐れる様になるのだ。

その理由は簡単でだ。欲が出るからだ。人は欲が出ると手に入れられるものは絶対に手に入れようとす。だからなのだ。

トップはだ。今彼に言うのだった。

「それは怖くないのか」

「左遷をしてもすぐに返り咲くことはできますので」

「すぐにか」

「はい、すぐにです」

また言う北條だった。

「ですから何の問題もありません」

「言ったな。では強硬手段も辞さないか」

「辞しません。では」

ここまで話してだった。彼は上司の前から敬礼をして退出した。そうして部屋から下がる時にだ。彼の同期と擦れ違ったのだった。

第三章

黒縁眼鏡に七三分けのだ。如何にも官僚といった彼がだ。北條を見ただ。

そしてだ。憎々しげにこう言ってきた。

「また何か仕事を貰ったそうだな」

「それが何か」

「テロリストへの対処か？」

「如何にも」

「精々成功させるんだな」

彼は北條が嫌いだ。同期の中で出世頭であるだけでなく飛び抜けて優秀でしかも嫌味な性格ときてはだ。嫌わない筈がなかった。

「そうするといいい」

「いや、君も」

頬を抓られてだ。北條は。

そのお返しにだ。平手打ちを仕掛けてきた。

「今の仕事。何だったか」

「ある署の署長だが」

「その署で部下達に責任を押し付けているといいい」
こう告げたのだった。

「書類のミスや不始末のな」

「何を根拠に言っている」

同期はだ。彼にそう言われてだ。

顔を赤から紫に変色させてだ。ムキになった顔で言い返した。

「私がそんなことをしているというのか」

「後は愛人か」

素っ気無くだ。北條は指摘し続ける。

「奥さんの他に。マスコミに嗅ぎ回れているそうだな」

「そんな事実はない」

「なかつたら怒ることはないな」

北條は全て知っていた。そのうえで言っているのだ。

「落ち着き給え。そのうちだ」

「そのうち、何だ」

「奥さんに知られて修羅場になるからな」

「よくそんなことが言えるものだな」

「何、気にすることはない」

嫌味をだ。無表情で続けてみせてからだった。

北條は去ろうとする。その彼にだ。

事実を指摘されそのうえで一番恐れている未来まで言われてだ。

怒り心頭の同期はだ。吐き捨てる様だ。彼の背に声を投げ掛けた。

「一体身体に何が流れているんだ」

「血だ」

「相当汚い血みたいだな」

「私の身体には青い血が流れている」

「ふん、やっぱり人間の血じゃないんだな」

「ドラゴンズブルーの血だ」

背を向けて歩きながらだ。彼は言った。

「それが流れている」

「中日ファンだというのか」

「そういえば君は巨人ファンだったな」

「何かあるのか、それで」

「残念だ。今年も巨人に優勝はない」

またしても嫌味だった。野球関連の。

「あの無能なフロントでは貴重な予算を消費するだけだな」

「巨人は球界の盟主だ」

「自称だな。盟主と言っのなら」

それならばだというのだ。

「西武にあそこまで華麗には負けないな」

かつての日本シリーズ四連敗のことである。

「あれは見事だったな」

「よくもそんな昔のことを出すな」

「では堀内か。よくもあれだけ無能な監督を生み出したものだ」

「あれは何かの間違いだった」

「盟主は間違いを犯さないのでなかったのか？そして盟主なら毎年優勝して当然だが近年は優勝する機会もかなり減っているな」

「口の減らない奴だ」

「事実を言っているだけだ。巨人には無様な負けがよく似合う」

巨人ファンに最も効果がある言葉を置いてだ。彼は去った。怒り心頭の同僚を残して。

そうしてだ。テロリスト達を調べてだ。すぐにだ。

彼等のアジトの場所、そしてテロ計画や所持している武器のこと、構成員や細かい動きまでだ。全て掴んだのだった。

そのうえでだ。部下達にこう話した。

第四章

「明日このアジトを襲撃します」

「このアジトをですか」

「明日ですか」

部下達にファイルを見せていた。そのファイルにだ。アジトの一つが細かく記載されていた。それを見るとだ。色々なことが書かれていた。それを部下達に見せながらだ。

彼はだ。部下達に会議室において話しているのだ。

「そうです。既に証拠は全て掴んでいますので」

「全員逮捕ですね」

「そうされますね」

「必要とあらば」

彼はこうも言った。

「彼等を射殺します」

「射殺!？」

「射殺ですか」

「そうされるのですか」

「はい、そうします」

部下達に対してもだった。北條は素っ気無く答えた。当然といった様に。

「彼等が従わないのならです」

「あの。それは少し」

「問題があるのでは？」

部下達はすぐに怪訝な顔になってだ。

そのうえでだ。こう北條に言ってきた。

「テロリストとはいえ射殺するのは」

「かなり」

「彼等の今回の計画は市街地での無差別テロです」

その計画のことも掴んでいた。それこそ裏の情報ルートまで使った。北條は情報入手し検証してだ。確認しているのである。

「革命と称する」

「赤軍派とかがやったみたいなですか」

「ああしたテロですか」

「自分達の存在や主張を誇示し宣伝する材料の」

「主義主張については言いません」

北條はそうしたことには興味がなかった。ではあるのは。

「問題は彼等の行動です」

「テロを行う」

「それですね」

「はい、ですから彼等が必要とあらば」

射殺する。そうするというのだ。

「それだけです」

「あの、それは」

「やはりです」

「どうしても」

部下達は難色を示した。しかしだった。

北條はだ。やはり何でもなかった口調でこう言ったのだった。

「責任は私が取ります」

「ですがそれでも」

「犯人の射殺はです」

「どうも」

「なら私が撃ちましょう」

今度はこんなことを言う彼だった。

「その時は」

「えっ、部長がですか」

「そうされるのですか」

「ですが」

「言った筈です。責任は私が取ります」

だからだというのだ。

「あくまでその時はですが」

「そうですか。そうされますか」

「その時は」

「ですから安心して下さい」

こう言ってだ。北條は部下達に告げてだった。そうしてだ。

彼等はそのアジトに向かいだ。そこを物陰に隠れながら包囲した。まるで豹の様に。

アジトにはテロリスト達が次から次に入っていく。その顔触れを見てだ。

彼等はだ。メールや小声で密かにやり取りした。

「今度は副委員長が入ったか」

「そして書記も入ったな」

「ああ、幹部が次から次に入ってるぞ」

「書記長も入った」

こうした組織の特徴だろうか。役職が多い。

第五章

「やっぱり仕掛けてくるな」

「テロを起こすな」

「じゃあやっぱり」

「捕まえるか」

「踏み込んで」

「突入です」

北條は部下達にメールで告げた。

「アジトに。その際は」

「その際は？」

「どうされますか？」

「銃を構えて入って下さい」

そうしてくれとだ。部下達にまたメール、近くの面々には小声で告げた。

「敵はおそらく武装しています」

「ですね。あの国から銃や爆発物を仕入れていますし」

「それならですね」

「向こうも反撃してくるからですね」

「何度も言いますが素直に逮捕されないのなら」

その場合についてもだ。北條はメールで告げる。

「容赦は駄目です」

「撃つ」

「本当にいいんですね？」

「人権派やそうした面々への配慮は不要です」

酷いことにそうした人権派は元々の思想が彼等が今困んでいるテロリスト達と同じなのだ。だから余計に騒ぎ立てるのである。

北條も部下達もそのことはわかっている。しかしだ。

北條はその社会的に力を持っている彼等を無視していいと言っ

だ。

「彼等が何を言ってもです」

「いいんですか？」

「向こうにはマスコミや弁護士が揃ってますが」

「政治家にもいますけれど」

政治家にもだ。彼等はいる。それが問題なのだ。

「圧力とかは」

「それは」

「今も来るには来ています」

実際にそうだとだ。北條はあっさりと述べた。

「あの奸獪徒からです」

「えっ、元総理の」

「あの政治家からですか」

「つつばねました」

この奸は何かあれば怒鳴り散らし責任を転嫁する人物として知られている。人間的にはそうした最低な人間であるがさらになのだ。

「あの政治家は元々運動家ですしね」

「学生運動でリーダーだったそうですし」

「その時に確か」

「同志をいつも盾にしていたとか」

「自分は四列目にいてすぐ逃げていて」

「あの国とも関わりが深いですし」

それももう周知の事実なのだった。

「あの政治家が圧力をかけるとなると」

「まずいですね」

「あの政治家が圧力を仕掛けてるとなると」

「職権濫用とか一切気にしない人物ですし」

こういう手の人物の常である。

「平気で法律も破りますし」

「人を騙しても何をしても自分さえよければいい人物ですし」

「ですから圧力をかけられているとなると」

「危険では？」

北條は部下にも人望があるタイプではないがそれでもだ。今部下達は圧力が来ていると聞いてだ。いささか不安になっていたのだ。果たしてテロリスト達が逮捕されても無事に済むか、それがだつた。

彼等は危惧を覚えていた。それで言うのだった。

だが、だった。北條はだ。

それに一切構わずだ。行くと言うのだった。

「では行きましょう」

「ならいいですが」

「部長がそう仰るのなら」

「テロリストを放置してはいけません」

法治主義国家の基本だ。

第六章

「だから絶対にです」

「全員逮捕ですね」

「何があっても」

「はい、そうです」

こう話してだった。そのうえでだ。

遂にだ。北條は自分が先頭に立ちアジトに踏み込んだ。既に全員の手には銃がある。

武装してだった。アジトに踏み込んで叫んだ。

「動くな、警察だ！」

「大人しくしろ！」

「全員逮捕する！」

奇襲が功を奏した。それによつてだ。

テロリスト達の多くは反撃する暇もなく捕まえられていく。アジトの中にいたメンバーの多くが逮捕されていった。しかしだ。

逮捕された彼等の顔を見回してだ。北條は言った。

「委員長がいませんね」

「そうですね。肝心のトップがですね」

「いませんね」

「地下室がありました」

既にアジトの部屋等もだ。彼等はわかつていたのである。

それでだ。その地下室にだった。北條は向かった。

地下室はコンクリートの冷たい部屋だった。そこに入ると。

ナイフを持った初老の男がだ。彼に襲い掛かってきた。まずはその一撃をかわした。

そのうえでだ。北條は。

それを攻撃とみなしてだ。ナイフを振り被り過ぎて体勢を崩している彼をだ。

すぐに撃った。銃は彼の胸を撃ち抜いた。鮮血が飛び散りだ。相手は死んだ。

射殺は一人だけだった。しかしだ。

このことはすぐにマスコミに取り上げられた。当然弁護士達は騒ぎだし所謂プロ市民も警察に対するデモをはじめた。そうしてだ。

警察のトップがだ。北條を呼び出してつけるのだった。

「わかっていると思うがだ」

「私についてですね」

「奸先生から話が来ている」

「元総理のですか」

「幾らテロリストとはいえ」

こうした話でいつも最初に来る枕詞だ。そこから来る言葉は。

「射殺はやり過ぎだと」

「それで私に退職をですか」

「いや、それは」

「奸先生のことは存じています」

北條はトップの前に立ちだ。素っ気無く述べた。

「それもよく」

「だから言うのか、今」

「私に圧力をかけ退職させたいのですね」

「いや、それは」

「わかっていますから」

まるで他人事の様だ。彼は言っていく。

「ですがそれでもです」

「それでもだというのか」

「相手はテロリストです」

もつと言えば彼等のその計画も全てわかっていることだった。大量殺人を計画していたのだ。無差別なテロ行為によって。

だからだとだ。彼は言うのだ。

「過去に既に何人も殺していて」

「しかも今回もだな」

「計画をしていましたし」

「爆発物に重火器も揃えていた」

「おまけに私に襲い掛かってきました」

「完全に黒だな」

どこをどう見てもだ。しかしだった。

そのだ。奸はというのだ。元総理は。

「やり過ぎだと言ってな」

「自分の主義主張と同じ人間を殺すのは何事かと」

「言うものだな。過激だ」

「あの人は幾ら総理を辞めろと言われても中々辞めませんでした」

それで国中が大騒ぎになった。一旦辞めると言いながらも総理の椅子にしがみつきだ。国政を混乱に陥れたことすらあったのだ。

そのことをだ。北條は言ってみせてだ。

そしてだ。こうも言うのだった。

第七章

「しかし私はやましいところはありません」

「だからか」

「辞めません」

「いいのか？ 奸元総理は手段を選ばない人物だぞ」

「それも御自身のことにですね」

「それでもいいのだな」

「半年で戻って来ます」

期限まで言ってみせた北條だった。

「では」

「左遷先は鹿児島だ」

「そこですか」

「鹿児島県警で。まあ役職はだ」

「何かの名誉職ですね」

「そうなる。一応はな」

あくまで一応だ。だがその閑職だけでは終わらない。少なくとも奸はそのつもりだった。しかしそれでもだというのだ。北條は。

「ですが半年です」

「鹿児島を楽しむのは半年か」

「それで戻って来ますので」

こう言い残してだ。北條は一人鹿児島に向かった。彼を妬み嫌い憎む面々はこれで彼は終わったと思った。しかしだった。

その半年後だ。北條はだ。

戻って来た。そしてその時にはだ。

奸は終わっていた。例のならず者国家との黒い関係、献金を受けていたどころか献金を送っていたことまで発覚してだ。

尚且つ震災の際の原発に関する怪しい行動も一連の国政を混乱させた行動もだ。全てその国の指示でやったことまで発覚したのだ。

つまりは。

その国の工作員であることが公になったのだ。これによってだ。奸のいる政党全体にもそうした工作員が多くいることも発覚しておりだ。すぐに議会は解散となり総選挙となった。最早そうなるしかなかった。

そしてだ。その政党は無惨に敗れた。多くの者が議員資格を失った。

それから多くの者、当然奸も外患誘致罪で逮捕され裁判にかけられることになった。そこには多くのマスコミ関係者や弁護士、運動家もいた。

まさに日本の大掃除になった。それが終わった時にだ。

北條は中央に戻って来た。そしてだった。

彼はだ。さらに出世してだ。警察庁長官に手が届く距離にまで来た。

その彼にだ。彼の直接の上司、そのトップが言った。

「また凄いことをしてくれたな」

「何がでしょうか」

「今我が国は大騒ぎだ」

「そうですね。一国の宰相が他国の工作員だったのですから」

北條は素っ気無く答えた。トップの席の前に立ったままで。

「騒がない筈がありません」

「そうだな。元総理は死刑になる様だな」

「あそこまですれば当然ですね」

「君を陥れるつもりが本人が縛り首になるか」

そのことについてだ。奸は心底怯えた。取調べで責任転嫁を繰り返しているとも伝えられている。

第八章

「自業自得か」

「そうかも知れませんか」

「君がそうさせたのではないのか？」

秘密を掴んで彼のやり方で発表させたのではないかというのだ。

「違うのか？」

「知りません」

北條は真実を隠して答えた。

「私は」

「そう言うのならいいがな」

「ただ。一つ申し上げたいことがあります」

しかしだった。ここでだ。

北條はトップにだ。こう告げたのだった。

「テロリストも元総理もです。悪でした」

「そうだな。ならず者国家と癒着し多くの人命を奪ってきたからな」

「破壊工作も意図的な原発の事故の誘発もです。全て悪です」

そうとしか言えないことだというのだ。

「悪は裁かれるべきですから」

「ああなつて当然か」

「この世には正義があります」

北條が次に言うことはこのことだった。

「そして警察はそれを守る立場にあります」

「正論だな」

「はい、正論です」

まさにそうだと。北條は言い切った。

「そして人の心の中には必ずそれがあります」

「正義があるとか」

「はい、言えます」

「何を根拠に言えるのだ？」

トツプは北條のその顔を見上げて問うた。座った状態で立っている相手を見上げているがそれでもだ。背の高い北條は大きく見えた。その彼を見上げてだ。問うたのである。

「人の中には必ず正義があると。悪を見てきて」

「私がそうだからです」

「君が？」

「私に正義の心があるからです」

だからだというのだ。

「言えるのです」

「言うな。君が正義か」

そのだ。嫌味で冷淡でだ。しかも人を殺すことに躊躇を見せず相手を倒す為には謀略も厭わない北條にだ。彼の得意の嫌味で返したのだ。

「言っていておかしいと思わないのか」

「思いません」

「それは主観か？」

「客観です」

淡々としたまでの言葉だった。

「実際に私は悪を犯していません」

「そういえば君は汚職やそうしたことはしないな」

「調べて頂ければわかります」

「そして警察の法規も我が国の法律も破らない」

「もっと言えば交通ルールもです」

それも完璧に守るというのだ。

「常に心掛けていますので」

「悪はしていないか」

「正義を守ることが私の義務ですから」

「だからそうしているのか」

「これからもそうします」

北條は淡々とした口調のまま無表情で述べていく。

「では」

「そうか。それではこれからもな」

「正義を守っていきます」

完璧な敬礼で応える彼だった。彼はやがて警察庁長官になった。完璧なまでに正義を貫く長官として知られた。それが彼だった。

しかし人望はなく嫌味で冷淡な人物だという評価は変わらなかった。しかし彼は一切悪は犯さず許さなかった。それもまた真実であった。そうした意味でだ。彼は間違いなく正義であった。それも素直な。

素顔の正義

完

2011・8・31

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0892ba/>

素顔の正義

2012年1月2日00時48分発行